

る問題が発生した。食品に対する安全性についての認識を再確認させられたが、このことを契機として、各自が責任をもって管理していくことが必要である。蜂産品における蜜源の確保、蜂群の管理、採蜜、瓶詰めなどに至るトレーサビリティのシステム作りを始めることが第1歩であると感じている。輸入については国により難しい事情があるものの、まずはできることから始めることではないだろうか。

「ハチミツ」に関しても、まだ簡単に思える

ことでわからないことが多くある。自然とのかかわりが強いのでなかなか研究結果が一定しないこともあるが、長期間続けて研究していただき、ミツバチ科学研究会で1つでも多く発表されることを願ってやまない。

ミツバチ科学研究会のますますの発展を祈り、この会の開催に尽力されている皆様に感謝したい。

(〒103-0023 中央区日本橋本町 4-8-17 共同ビル  
(社) 全国はちみつ公正取引協議会)

## ニュース



APIMONDIA

### アピモンディア シンポジウム 発展途上国のハチミツ国際取引に関わる諸問題

2004年11月23日～28日 ハノイ

主催：ベトナム農業開発省ミツバチ研究開発センター、  
アピモンディア養蜂経済、村落開発養蜂、蜂病各常任委員会



MARD

アピモンディア蜂病委員会が2002年10月にドイツで開催した“ハチミツ中の残留物質防止対策”シンポジウムでは、この問題が含む複雑で多様な側面が明らかにされた。しかしハチミツ市場に加わりつつある発展途上国からの出席者は少なかった。

ハチミツの国際取引では、輸入先の基準を満たす品質が前提条件であり、蜂場から取引市場までのすべての段階でそのことが理解される必要がある。ハチミツ輸出をめざす途上国の政府関係部処は、輸出相手国の法規制を理解、遵守することを求められる。EUに輸出する場合、ハチミツ中に農薬、抗生物質、その他の残留物質を含まないと、産出国が証明することを要求される。残留物質は蜂病対策で投与された薬品、蜂群管理中に混入した物質、周囲の汚染された環境からの混入物などである。

残留物質を含まないハチミツの需要増加は途上国のハチミツ生産に大きなチャンスである。今回のシンポジウムの目的は、途上国で活動するハチミツ生産者が国際市場により多く参入できるように、彼らを支援することである。その

ために以下のような立場を異にする人たちが一堂に集う場とした。

発展途上国のハチミツ生産者団体、ハチミツ貿易専門家、残留物質に関する法規制の準備、制定に携わる人、残留物質の同定、定量に関わる研究者、残留物質を含まないハチミツ生産管理方法の研究者。

これら分野の皆様は、2004年11月23-28日にハノイにお集まり下さるようお招きする。

登録費用は2004年7月30日まで参加者270米ドル、同伴者170米ドル。登録費は会議資料、昼食、お茶、見学旅行参加費を含む。また、発表論文要旨の締めきりは8月31日。

(第1回案内より抜粋)

発表申込み、見学旅行、展示会の概略などはアピモンディアのウェブサイト ([http://www.beekeeping.com/apimondia/index\\_us.htm](http://www.beekeeping.com/apimondia/index_us.htm)) を参照いただきたい(またはミツバチ科学研施設にお問い合わせ下さい)。日本からも関係各位にできるだけ多く参加していただくのが望ましい状況であろう。

役立ちます 掲載：小野正人  
 北海道新聞・8月9日。「下北半島が北限」だけど…  
 ニホンミツバチいるの？ 掲載：吉田忠晴  
 日刊ゲンダイ・8月16日。話題の焦点 掲載：松香光夫  
 朝日新聞・8月7日。3種の香り成分、スズメバチ刺  
 激 掲載：小野正人  
 日経新聞・8月7日。オオスズメバチ 怒ると仲間呼  
 ぶ香り 掲載：小野正人  
 産経新聞・8月7日。スズメバチは化粧品で興奮!? 掲  
 載：小野正人  
 読売新聞・8月7日。香水は「警戒信号」「狙われるワケ」  
 解明 掲載：小野正人

毎日新聞・8月7日。リンゴ、バナナの香り スズメ  
 バチの興奮誘う 掲載：小野正人  
 東京新聞・8月7日。オオスズメバチから3種類の化  
 学物質 掲載：小野正人  
 神奈川新聞・8月7日。香料が攻撃の合図 オオスズメ  
 バチで解明 掲載：小野正人  
 しんぶん赤旗・8月7日。スズメバチ 化粧品も要注意？  
 警戒情報の化合物解明 掲載：小野正人  
 科学新聞・8月22日。スズメバチの毒液成分 複雑な  
 機能解明 掲載：小野正人  
 朝日小学生新聞・8月21日。スズメバチにご用心 掲載：  
 小野正人

## ニュース

### アピモンディア主催シンポジウム

今年11月にベトナム・ハノイ市でハチミツ  
 の残留防止の国際ルール作りおよびそのための  
 途上国支援を目指すシンポジウム「発展途上国  
 のハチミツ国際取引に関わる諸問題」が開催さ  
 れる。詳細は本号94ページに掲載した。

### 研究施設スタッフの異動

巻頭記事にあるように、4月1日より佐々木  
 正己教授が主任（任期制）となり、また去年は  
 非常勤講師・研究員として加わっていた佐々木  
 哲彦東京大学助手が、研究施設専任助教授とし  
 て本採用となった。

### 小野助教授が学会賞受賞

小野正人助教授は3月に京都工芸繊維大学で  
 開催された第48回日本応用動物昆虫学会にお  
 いて、社会性ハチ類の化学生態学、行動生態学  
 に関する一連の研究が評価され、学会賞（記念  
 品と副賞）を受賞した。

### 訃報

Bee World 誌に、玉川大学との関係の深い以  
 下ご両名の訃報が掲載された。やや時間がたっ  
 ているが紹介して、ご冥福をお祈りしたい。

#### レイドロー教授(1907-2003)

Harry H. Laidlaw Jr. 教授（アメリカ・カリ  
 フォルニア大学）は2003年9月19日に96  
 歳で逝去された。「ミツバチの遺伝と育種の父」  
 として知られ、「Quenn Rearing (1950)」などの  
 著書の他、多くの関係研究論文がある。1981  
 年に玉川大学50周年記念式典に参加のため来  
 日し、都内で講演会も開催した。

#### フォーボール教授(1931-2003)

Günther Vorwohl 教授（ドイツ・ホッヘンハ  
 イム大学）は2003年12月15日に72歳で  
 逝去された。特に植物との関係を中心としたハ  
 チミツ研究の大家で、化学分析を用いた研究は  
 もちろん、花粉分析による蜜源同定法の確立へ  
 の貢献も知られる。アジア養蜂研究協会の各大  
 会にも足を運んでいただいていた。

編集後記 国産ハチミツの需要増加で、蜂群需要も高まっているのを、実験用蜂群の入手が難しいことで実感した。蜜価は上がっているとはいえ、蜜源不足から生産はままならないようで、今年も各地から不作情報が寄せられた。また麻痹病が多発しているようにも聞いている。飼育・生産環境の整備が望まれている。今号では、スロバキアの Simuth 教授にはローヤルゼリータンパク質について特にご投稿いただいた。松浦教授は連載5回目、建元氏には研究会での発表をまとめていただいた。さて、巻頭記事でもおわかりのように、ミツバチ科学研究施設はこの4月から佐々木主任を迎えて新体制に移行した。学術面ではCOEの関係もあって分子生物学を軸とした研究の進展が期待されるが、一方応用面では養蜂家や関連業界との結びつきも強化したいとの所信を掲載させていただいた。読者の皆様の一層のご理解とご協力をお願いしたい。（純）